

## 「統 統計学入門」

横浜市戸塚保健所所長 杉田暉道 著

横浜市立大学教授

山 賀 岑 朗

著者は、横浜市立大学医学部公衆衛生学講座の助教授として、統計学の講義・実習を主として担当しておられたが、本書はその長年にわたる経験、知識に基づき、既刊の「統計学入門」の続篇として、特に応用面を重視して書かれたものである。

第1章（得られたデータを解析するにはいかなる統計学的方法を用いたらよいか）、第2章（計算方法）との2章に分かれているが、第1章では色々の種類のデータの例が挙げられており、これらをまず、どの値を用いて処理したらよいか、すなわち平均値で処理するか、百分率で処理

するか、あるいは相関関係と回帰直線で処理するか、などを見定め、それが決まったら次にどのような方法で解析したらよいかの方向づけを示している。

かくして方向づけができたなら第2章で同じ項目を見出し、具体的な計算処理の方法を理解するという仕組みになっている。

更に本書では難解な統計学上の専門用語はできるだけ避け、日常使用される言葉で計算方法を解説している。このことは些細なことであるかもしれないが、“統計学”という、その言葉を聞いただけで何となく敬

遠しなくなってしまうような意識を緩和するうえで非常に有効な取り組みであると考えられる。

また応用篇というだけあって、臨床医学方面で最も必要と思われる有用な方法を紹介し、かつ相互の比較検討を行ってその優劣を初心者にもわかりやすく解説している。欲を言えば、第2章でもう少し例題を多くして計算の実例を示してもらえればより親切であったと思われる。更に新しい企画を希って止まない。

統計学に関する参考図書は極めて数多いが、本書のような発想で、わかりやすく、しかも気楽に取り組みるように書かれたものは見当たらず、特に初心者あるいは統計学的処理の苦手な人々にとって誠にユニークな手引書であると考えられる。

B5判 126頁 図8 1984  
¥2,000 千250

医学書院 刊

### Coffee Break

#### 良い雑誌の条件

この間ある会合の後、ジョッキを傾けながら世間話をしているうちに、医学雑誌の話が俎上にのぼった。大凡の内容は次のごとくである。医学雑誌は現在大小合わせれば何百種類にも達する夥しい数が毎月発行されている。しかし、自分の手元に来る分だけでも何十種類なので、熟読玩味などということは不可能で、大部分は目次を見て書棚にしまっしまい、特に注意を引いた内容のものだけ目を通し、忙しいときには、要点のみを読んで、それで理解したような気分になって満足する場合が通例ではないだろうか。

その中で、ちょっと詳しく読んでみようかなと思わせるもの、つまり読者の気を引くものは何であろうか。題名か、著者か、書出し部分の読みやすさ、すなわち、漢字が少なく難解な文章がないことか、文字が少なく図表やイラストがカラーで数多く入っているものか、あるいは逆に、内容が高度で格調高い文章か、論旨の一貫性、簡明な結論か、などいろいろな意見が出た。なかには表紙の体裁も大きな理由にはならないかという意見もあった。

なるほどこれらの要因は雑誌として必要で編集方針

によって異なるであろう。こう考えてくると、私たちの雑誌を読む態度は雑誌により相違のあることに気付く。つまり、内容が高度で文章も堅苦しいものは、サアこれから読むぞと気持ちを引き締めて机に向かうし、診察後、一服しながら気楽に読めるもの、開封したついでにちょっと目を通すものから仰向けに寝転んだほうが読みやすいものまで実に様々である。各々存在理由もあり必要ではあるが、内容の伴わない肩肘はった書き方の雑誌は嫌われそうである。そうかと言って最近はやりの漫画的なものも読者に迎合するようで好ましくない。要は、確固たる信念を持って初心を貫き、時代に迎合することなく、また目前の読者に媚びることをしないで、常に読者の心を魅了してやまない内容の雑誌ができればよいのだが、果たしてそれは可能だろうか。

テレビ、パソコン、ワープロという時代に“見てわかる”ことは大切である。丹羽寛文先生から伺った言葉であるが、Einhornは“視覚—これは最も迅速かつ確実に物事を判断できる感覚”と言っている。

(名古屋大学第2内科 中澤 三郎)